

イナズマイレブンGO スカイハイ

吟遊詩人ルナ

「ええっ！雷門中から転校の命令!?」

謎の国際組織、世界教育特殊開発機関、WESSCA（ウェスカ）の命令により、異国の地の学校・桜城（おうじょう）中学校に転校することになってしまった天馬たち。そこで彼らを待ち受けていたのは、個性的な新しい仲間たちと、次世代の学校制度の体験、そして世界レベルのサッカー大会『聖セバスティアヌス祭』だった！しかし、その裏で、全世界を巻き込む巨大な陰謀が蠢き始めようとしていた…。オリジナルキャラクター続々登場予定！新天地での天馬たちのサッカーと青春と世界救出劇、キックオフ!!!!!!

————

こんにちは！そして初めまして！

初めて作品投稿します吟遊詩人ルナです！

処女作は本当に今更ながら、イナズマイレブンGOに挑戦します！

イナズマイレブンGO大好きなんです！

下手くそですが頑張って書いたので、一瞬でも楽しんでもらえたら嬉しいです！

※注意※

・初めて投稿するので、システムがまだよくわかっていません。戸惑うことがあるかもしれませんが、ご了承ください。

・超超超超下手です。暖かい目で見てください。

・更新が遅いです。あと不定期です。

・自己満足で書いているので、意味のわからない文章があったり、何回も編集が入ると思います。ごめんなさい

・オリジナルキャラクター登場します。

・キャラ崩壊を多々含んでいます。ご注意ください。

・原作崩壊も凄いです。ご注意ください。

・誹謗中傷等のご遠慮願います。

それではどうぞ!!!!!!!!!!!!

★9月10日お知らせ★

更新が大変遅れています。申し訳ありません。

お知らせが2点あります。

・筆者の学校が新学期に入ったので、今までよりも更新が遅くなります。正直、執筆を続けることができるかわかりません。しかし、何とか時間を見つけて書いていこうと思っています。どうぞご了承ください。

・今までのストーリーを読み返して見たところ、書き直しを検討しています。大変なご迷惑をおかけしますが、もしかしたら今までのストーリーに書き直しを入れる可能性があります。本当にごめんなさい。

未熟者の作者ですので、読者の皆様に多大なご迷惑をおかけするかと思います。しかし、執筆を続けるよう努力して参りますので、何卒ご理解をお願い致します。

目次

第1章初めまして、松風天馬くん！	1
第1話 衝撃！雷門中転校命令！	1
第2話 円堂監督の想い	16
第3話 上陸！ウィスルフレー国	27
第4話 これが桜城中学校だ！！	40
第5話 集結！桜城イレブン！！	52
第6話 桜城中学校、始動！！	65
第7話 不良少年と聖セバスティアヌス祭！	80
第8話 目指せ！聖セバスティアヌス祭！	97

第1章 初めまして、松風天馬くん!

第1話 衝撃! 雷門中転校命令!?

「えっ、サッカー部全員、放課後に進路指導室集合だって?」

松風天馬が空野葵から呼び出しのことを聞いたのは、昼休みのことだった。

「なんか重要な発表があるらしいの。今日はサッカー部練習なしだって」

「ええっ!?」

葵の「サッカー部練習なし」の言葉に、天馬が大げさと言えるリアクションを示す。

「ボクたち、進路の先生に呼び出されるようなことしたっけ?」

お弁当のコロッケを口に運びながら、西園信助が不安そうな顔で葵に尋ねる。

「うーん、あたしの知ってる中では特になんともなかったから、別に大丈夫だとは思うけど…でも、それにしてもなんなんだろうね…」

「怖いよ…せめてどんな内容の話かは言って欲しいよ…」

「あ！信助まさか、先生方の購買勝手に使ったりしてないでしょうね!? あんたそれで怒られてたでしょ!？」

「心外だなあ〜！あの後散々怒られて、挙句の果てには廊下の雑巾がけまでさせられたんだからもうしてないよ！っていうか、それだけ前の話だと思ってるの！」

「つい先週のことじゃん！」

「あ、あれ…そうだった？」

「もう！しっかりしてよ〜！」

ポカンとする信助に憤慨する葵を横目に見ながら、天馬は呼び出しのことで頭がいっぱいだった。

「どうしよう…もしフィフスセクターのときみたいにサッカーが出来ないなんてことになったら…」

「そんなことはないだろう。それこそフィフスセクターの問題が元で、今の世論はサッカーは自由にさせるべきだっていう意見が主流だからな」

天馬の不安に、剣城京介が冷静なフォローを返す。

「そうなの?じゃあ、もう管理サッカーなんてなくなっただんだね!」

「あくまでその考えが主流、っただけだがな」

「剣城は博識だね。どうしてそんなこと知ってるの?」

信助が興味深げに尋ねた。

「:お前ら、少しはニュースを見るか新聞を読め。ホーリーロードが終わってから三ヶ月ぐらいその話で持ちきりだったろうが」

「(え)、覚えてないよ」

「はあ:キャプテンがサッカー知らなくてどうするんだよ:」

目をパチクリさせる天馬と信助に、剣城は小さく肩をすくめる。

「:でも、やっぱりみんなが本当のサッカーをやりたいがってことなんだよ!きつとサッカーも喜んでる!」

天馬が、目を輝かせる。

「はは、まーたお得意の『サッカーが喜んでる』かよ」

天馬の後ろから、狩屋マサキが呆れたように言った。

「狩屋!だって狩屋もそう思うだろ!みんな本当のサッカーがしたいんだって!」

「はいはい、わかってますよ」

「もーうっ…」

狩屋の中途半端な返事に、今度は天馬が肩をすくめた。

「あはは…まあ天馬くん！僕たち、何か悪いことした心当たりないし、大丈夫だよ！こういうときこそ、なんとかなるさ！でしょ！」

狩屋のとなりから、影山輝がひょっこり顔を出し、力強く天馬を励ます。

「輝…うん！そうだよね！なんとかなるさ！」

それに元気づけられたのか、天馬も笑顔で返した。

「あ、もう直ぐで授業始まるよ！次の授業って体育じゃなかったっけ!？」

「「やばい！忘れてた!!」」

葵の声に、天馬と信助と影山が真っ先に反応した。大急ぎで教室から飛び出していく。続いて狩屋と剣城が出て行った。

「きつと…大丈夫だよね」

ひとり残された葵が、ポツリとつぶやいた。

＊

コンコン。

「どうぞ」

「失礼しますっ！」

放課後。

サッカー部の一同は、進路指導室に集合していた。

「座っていいですよ」

進路指導部長の先生が、面倒そう言った。ロの字に置かれた長テーブルに添えられた丸椅子に腰を下ろす。

「今回皆さんと呼んだのは、ある組織から雷門中に指示が下ったからです」

「！」

天馬と剣城が、目を見合わせた。フィフスセクターのことを経験していた一同に、直ぐに緊張感の糸が張られるのが感じられた。

「ある組織、とは？」

二年生のミッドフィルダー、神童拓人が冷静に尋ねた。

「今回我々が指示を承ったのは、他でもない：『世界教育特殊開発機関』です」

「世界教育特殊開発機関…!？」

神童は驚いたように目を見開いた。

「…世界教育特殊開発機関って、なんですか？」

天馬が、緊張気味の顔で尋ねた。他の者も、怪訝そうに違いの顔を見合わせ合っている。

「そうですね…この機会ですから、みなさんにも簡単に説明しましょう」

先生はそういうと、手近なところにあったホワイトボードを手繰り寄せた。

「世界教育特殊開発機関、通称WESCA（ウェスカ）は、3年ほど前に発足した国際組織です。今までの全世界の教育カリキュラムの見直しや教育による子供の発育の研究などで、人類にとってより効果的で合理的な新しい教育の方針を見出すことを目的としています。そして、この組織は…」

そこで、先生はさもありがた迷惑と言わんばかりに、大きく溜息をついた。

「世界の教育に関わる全ての団体に干渉する権限を持っています」

「!!」

「世界の…全ての教育に関わる団体に…!？」

「まあ、君たちでいう、フィフスセクターの勉強バージョンの世界レベルとでも言えればいいでしょうか」

「フィフスセクターの：勉強バージョンの：世界レベル：」

天馬は身震いした。それが自分たちにどんな指示を下したんだろう。天馬はサッカードは大好きだったが、勉強は大の苦手だった。もし勉強ができないせいでサッカーができなくなったらどうしよう。ふと見ると、信助が腕を組んで、小刻みに震えていた。どうやら彼も同じことを考えていたらしい。

「：それで、WESCAが俺たちにどんな指示を出したんですか？」

神童が緊張の色を滲ませた顔で尋ねた。

「はい：それが非常に厄介な内容で：」

「と、言いますと？」

「実は：」

雷門サッカー部の数名に、雷門中を転校するよう、命令が出ているのです」

「え……」

[illegible]

「先生！　どういふことですか！？　オレたち転校しなきゃいけないってことです
か！！??」

「お、落ちて着いてください！説明しますから!!」

先生はしばらくの間、呼吸を整えた。

天馬は放心した。雷門中を、転校する？天馬は雷門中が、雷門中のみんなが、雷門中のサッカーが、大好きだった。転校するなんて考えたこともなかった。オレはサッカーをするために雷門中に来たのに、なんで…？

「ごほんごほん……えー…転校というところかなり語弊があるかもしれませんが…ほぼ転校と言っているほどの内容だったのです。君たちは『世界教育特殊開発機関日本少年サッカー大使』として、あちらの本部がある国に、君たちだけで移住…正確には長期滞在…してもらおうという話です」

「長期滞在？」

天馬は少し希望を持った。長期滞在ということは、ずっと向こうで暮らさなくてはいけないというわけではない。もしかしたらまた雷門中のメンバーでサッカーができる日が来るかもしれない。

「ええ：ですが、日本に戻すかはWESCAが決めるので、まあそうそう帰れないと思った方がいいでしょう」

「…」

天馬は黙り込んだ。天馬の希望は挫けた。

「それで、どうして俺たちが？」

神童が質問を重ねた。

「どうしてかというところ：このWESCAは、太平洋のとある島に拠点を構え、そこで研究などが行われているのですが、研究の対象となる人間は、あちらから指示が出されます。指示が下った人間は向こうの島に移住し、向こうの島の学校に移らなくはない決まりになっているのです」

「では、『世界教育特殊開発機関日本少年サッカー大使』とは？」

「それは、WESCAが移住する命令を出した人間があちらの本部で出される待遇制度です。君たちの場合、移住した後は全ての学費・生活費・寮の維持費などが全額免除されます。君たちはWESCAが帰れというまでまったくお金を払わずに生活できるわけです」

「「ええ!?!」」

結構な人数の中学生が長く暮らす間のお金を全額免除? 天馬は息を呑んだ。もしかしたら、WESCAとは自分が思っているよりも大規模な集団なのかもしれない。

「長期滞在とは、具体的にどれくらいになるんですか?」

神童の親友・霧野蘭丸が質問した。

「そうですね、君たちの態度や行動にもよりますが…君達は向こうで中学を卒業することは確かですね。そのあとは向こうの大学に行くか、留学するかになります。雷門中の人とはその時にいくらでもサッカーできますよ」

天馬は先生の最後の言葉の言い方が気に入らなかった。『今は黙って言うことを聞け』という先生の思いが見え見えだった。

「中学生がお金も払わずに勉強もサッカーもできるんです。移住してくれそうですね」
先生は半分決めつけるように言った。

「だからって……！せっかくまた雷門中のみんなとサッカーができるって思ったのに！」

天馬が抗議した。彼はグラウンドセレスター・ギャラクシーと言う宇宙大会に行っていた。雷門中のメンバーでサッカーができるようになってから、まだ3カ月も経っていないかった。

「だいたい、なんで俺たちがそんな研究の対象にならなきゃいけないんですか」
霧野が先生を睨みつけながら言った。美しい顔の眉間にしわが寄っている。

「その……だから……君達が雷門中の選手だからこそ、選ばれたのです」

「「えっ？」」

「雷門中の選手だから選ばれた……？」

「はい……WESSAはより効果的で合理的な教育の開発を目的としているんです。つまり、君たちのような有能なスポーツ選手が、今よりもっと社会で活躍できるようにするための教育の開発も、目的のうちなんです。雷門中の選手は、研究には

うってつけなんだそうですね。君たちはグラウンドセレスター・ギャラクシーまで優勝した優秀なプレイヤーでし、それに：フィフスセクターに革命を起こした：あー：とても行動的なサッカー部ですから」

「：それって、誰が転校するんですか？」

天馬が尋ねた。

「そうですねえ：」

先生は薄いバインダーを開いた。

「転校することになってるのは：松風くん、西園くん、剣城くん、神童くん、霧野くん、倉間くん、影山くん、狩屋くん、空野さんですね」

「えっ!? そんなに多くの人が転校するんですか!？」

天馬は驚いたように言った。

「ええ：私は指示を受け、それを伝えるように言われただけなので、なにもわからないんですが：とりあえず、転校するのはこの9人ですね」

先生が淡々と言った。

「そんなにいなくなったら：雷門中のメンバーが足りませんよ!？」

「人数はなんとかあります。雷門中にも、他校から数人をサッカー部員として転校生を受け入れる手筈を整えているそうです。大丈夫、なんとかはできますよ」

先生は面倒そうに言った。

「そんなの嫌です！オレはこの仲間です！サッカーやりたいんです！オレはもう一度雷門中のメンバーのサッカーがしたいんです!!」

天馬は叫んだ。

「私に言わないでください！これはWESCAの命令なんです！従わなければ法的な処罰が下るんです！フィフスセクターとは比べ物にならないほどの処罰が！君たちの我儘のせいで、雷門中に世界的な悪評価がついたらどうするつもりですか!?破滅するのは君たちなのですよ!!」

先生も負けじと声を張り上げた。

「とにかく！○月××日までには考えをまとめて、出発する準備をしてください！これは命令です！わかりましたね！問答無用！はい、解散！」

先生は半分やけくそになりながら天馬たちを出した。まるで天馬たちを進路指導室から追い出さんばかりだった。

「ふざけんなよ……!俺たちがいなくなったら誰が雷門サッカーを受け継ぐっていうんだよ!」

「あはは……俺たち終わりましたね……今度は世界レベルでの制裁が下ろうとしてるんです……」

倉間典人が悔しそうに唸り、速水鶴正は絶望的につぶやいた。

「まあ、みんな落ち着くんだ……まずは円堂監督に話を聞きに行こう。多分、この話は監督にも渡っているはずだ」

みんなが不満をぶちまけ合う中、剣城だけはひとりで冷静に提案した。

「……そうだね、円堂監督がどう思うか聞いてみよう。もしかしたら、なにかアドバイスしてくれるかも」

ひとまず落ち着いた天馬もそれに同意した。

「(円堂監督なら……どう思うのかな。やっぱりみんなとサッカーがしたいっていうのかな。それとも……)」

神妙な顔で考えながら、天馬はサッカー棟に向かった。

読んでくださった方、ありがとうございました!!!!!!
次回もよろしく願います!!!!!!

第2話 円堂監督の想い

雷門中サッカー部監督・円堂守は、サッカー棟のミーティングルームの椅子に座って、ひとり思索にふけていた。今朝方、雷門中に届けられた一通の手紙を、ずっと頭の中で反芻していた。

【勅令 雷門中学校御中

この度、貴校に世界教育特殊開発機関から、以下のサッカー部員を

『世界教育特殊開発機関日本少年サッカー大使』の任命とともに、ウィスルフレー国王立桜城中学校に在学のもと、ウィスルフレー国の長期滞在を命令する。

『世界教育特殊開発機関日本少年サッカー大使』任命者

1年生

松風 天馬 西園 信助 剣城 京介 狩屋 マサキ 影山 輝 空野 葵

2年生

神童 拓人 霧野 蘭丸 倉間 典人（敬称略）

天馬たちは、この命令をどう思うだろうか。天馬と剣城と神童はグランドセレス

タ・ギャラクシーから帰ってきてまだ3カ月も経っていない。今は久しぶりに雷門中のメンバーとのサッカーを楽しみたい時期だろう。その中で、また雷門中の仲間と別れる時がきてしまった。しかも今回はいつ戻ってこれるかわからないのだ。

おそらく、天馬はためらうだろうな。円堂はそう踏んでいた。天馬はいつでも、キャプテンとしてサッカー部を引っ張って来た。雷門に入学した時からサッカーに対する情熱は人一倍強かった。フィフスセクターによって腐敗の道を進んでいたサッカーの立て直しに一役買い、人類の未来を救い、挙句、アースイレブン代表として地球の危機に立ち向かった。そこにはいつも一緒に戦った仲間がいた。アースイレブンでは黒岩の作戦で離れ離れになってはいたが、宇宙大会が終わった今、再び絆を深め合おうとしている。その中で、再会があるかわからない別れ……なんたる運命の悪戯よ。

しかし、と円堂は思った。天馬に考えて欲しいことがあった。

「円堂監督！ 少しいいですか？」

背後から声がし、不意に我に返った。

「ああ、どうしたんだ、天馬？」

振り返ると、サッカー部のメンバーが全員集まっていた。

「監督は、WESCAの命令を聞きましたか」

「ああ。雷門中に届いた実際の勅令の手紙を見た」

「！！！！」

「どうやら本当に向こうに送るつもりらしいな」

「監督：オレたちはどうするのが正解なんでしょうか。フィフスセクターの時みたいに反抗できるかはまだわからないし：でも、オレたちどうすればいいのか決められなくて：監督はどう思いますか？」

やはり。そうくると思った。だから円堂は返事を用意していた。

「：天馬。お前は何がしたい」

「えっ？」

天馬はキョトンとした。

「お前は、お前自身としては、どう思ってる。お前が心から望んでいることはなんだ」

「オレは：」

自分が本当に望んでいること。それは、サッカーをすることだ。雷門中のみんなとサッカーをしたいこともあるが、雷門中だけに限定しない。アースイレブンの時は仲間と離れてしまったけど、多くのサッカーを愛する人に囲まれてサッカーができた。心からサッカーを楽しみたい。それが、天馬が望むことだった。今までも、これからも。

「オレは…サッカーがしたいです。雷門中のみんなともしたいですけど…一番やりたいことは、たくさんのサッカーを愛する人とサッカーすることです。多くの人と一緒に、サッカーがやりたいんです」

天馬は緊張しながらも、堂々と答えた。

なんとも天馬らしい答え。円堂は微笑んだ。

「…それなら、お前のその思いに正直になって、真剣に考えてみる。魂を込めて出した答えは、絶対に間違いなんかじゃない。お前が心から望むことがそれなら、どうすればそれを叶えられるのか。それを真剣に考えてれば、必ず最高の答えが出る」

円堂はそういうと

「…みんなも、考えてみる。自分は本当は何がしたいのか。それを真剣に考えた上

で…どうするかは自分たちで決めろ」

全員に話しかけた。

「今日はゆっくり休みながら考えろ。今後どうするのか。それが今お前たちが一番しなきゃならないことだ」

「はいッ!!」

＊

何もせずにいるのはあまりに味気ないと、サッカー部は少しランニングをした。ランニングの後、天馬はもう一度全員にミーティングルームに集まってもらった。今後のことを話し合うためだ。

円堂は用事があると言って、職員室に入っていった。

「天馬はどう思ってるんだ？」

神童が天馬に尋ねた。

「あの後考えたんですけど、オレ、転校するのもアリかなって思えてきたんです」
みんな、驚いたように息を呑んだ。

「さっきも円堂監督に言ったんですけど、オレ、サッカーがしたいんです。グラッ

ドセレスタ・ギャラクシーが終わって、また雷門中のみんなと一緒にサッカーしたいのはもちろんなんですけど…オレ、今までとは違った世界を見てみるのもいいんじゃないかなって思いました。アースイレブンとして宇宙に行ってきた、オレ、宇宙には、オレたちの想像もつかないようなたくさんのサッカーのあり方があるってわかったんです。今度は今までに見たことのない世界に行けるんです。行ってみる価値はあるんじゃないでしょうか」

「だけど…それなら、雷門中のサッカーはどうなるんだ。残るのは確か…」

「錦センパイと、浜野センパイと、速水センパイと…三国センパイと天城センパイと車田センパイですね」

「ということは…外部からは少なくとも5人入ってくるといわけか」

「ご、5人も雷門中以外から入ってくるんですか…俺たち何かされたらたまりませんよ…」

速水がふるえ声でつぶやいた。

「大丈夫です。確かに6人しかプレーヤーは残ってませんが…センパイ方は今まで一緒に雷門サッカーを貫いてきてくださったんです。ホーリーロードの時も、最

初はいろいろあったけど、みんなで優勝できたじゃないですか。だから…センパイ方が残ってくれるなら大丈夫です！雷門中のサッカーは無くなったりしません！」

天馬は力強く言った。

「そーそー！ちゅーか、もしなんかあったらフィフスセクターの時みたいに、天馬たちがWESCAってやつをやっつけちゃえばいいんだって！グランドセレスト・ギャラクシーも優勝できた天馬たちだし、そんなくらいできるっしょ！」

浜野海士が続けた。

「浜野：簡単にいかどうかわからないぞ。なんせ今度は世界レベルだし…WESCAが扱ってるのはサッカーじゃなくて教育界全般なんだから、対等に話ができるかもわからんぞ」

倉間が慎重に言った。

「大丈夫大丈夫！オレたちここまでできたんだからさ、もうなんでもできるんじゃない？時には向こう見ずに突っ切ることも必要っしょ！」

「はあ…どうやったらそんな樂觀主義になれるのか教えて欲しいですよ」

浜野の緊張感のなさに、速水はため息をついた。

「…俺も天馬の意見に賛成です」

「剣城！」

みんなの驚きを尻目に、剣城は続けた。

「今は、俺たちがWESCAに対して持っている情報が少なすぎます。俺たちがWESCAの本部に行けば、もっと細かいことがわかるかもしれません。それによっては、また戻る方法も見つかる可能性もあります。それに…フィフスセクターのシードだった身としては、あまり無計画に抵抗しない方が賢明だと思います。はじめは様子を見て、いざとなれば浜野センパイの言うように、俺たちの実力で切り抜ければいいんじゃないでしょうか」

「…」

しばし、沈黙が続いた。元フィフスセクター所属の剣城の意見は、他の何よりも説得力があるように思えたのだ。

「そうだな…ただもぐだけでも仕方ない。ここは腹を決めて、指示にしたがってみよう。まずは、何か行動を起こさなくては何も始まらないからな」

「神童センパイ！」

「ま、なんでもいいからまず行動…か。いいんじゃないのか？俺もこの話に乗るぜ」

「霧野センパイ！」

「雷門サッカー部のブレイン二人が賛成か。こりゃ、乗った方がうまくいきそうだな」

「倉間センパイも…ありがとうございます！」

天馬は感激のあまり立ち上がった。

「ここまでくれば、もう決まりだね！」

「うん！」

「せっかくまた一緒にサッカーができると思ったのに…また離れることになっちゃったな」

「センパイ…またきつと会えますよ」

「天馬！もし向こうで雷門サッカーを汚すようなことしたら許さんぜよ！」

「大丈夫ですよ！センパイこそ、必ず雷門サッカーを守り切ってくださいね！」

いつの間にか外は日が暮れて、夜が訪れようとしていた。みんなはそれぞれの帰

路につきながら、残された時間について話し合っていた。

天馬と信助と葵の3人も、そのうちだった。

「また、みんなと離れちゃうね」

「しかも今度はいつ戻ってこれるかわからないし……」

「大丈夫かな……あたしたちだけで移るんだよね?」

先の見えない話に、不安が増してくる。

「でも……やると決めたんだ。いざとなったらオレがみんなを守る。宇宙大会を勝ち抜けたオレたちなんだ。きっと大丈夫!」

自分の不安を吹き飛ばすように、天馬が言った。

「そうだよ、悩んでも仕方ないよね!」

「こうなったら、なるようにしない!」

天馬の明るい声に励まされたのか、信助と葵も同調した。

空にはいつの間にか、一番星が輝き始めていた。

それを眺めながら、天馬は新しい冒険に想いを馳せた。

読んでくださった方ありがとうございました!!!!!!

展開が早いですね：下手で本当にごめんなさい。

次回もよろしく願います!!!!!!

第3話 上陸! ウィスルフレー国!!

~~~~~あなたが川に落としたのは、金のサッカーボールですか?

それとも、銀のサッカーボールですか?

いや、オレが落としたのは普通のサッカーボールです。

~~~~~正直者ですね。そんなあなたには金と銀のサッカーボールをあげましよう。

うわあい! ありがとうございます…

「天馬! そろそろ着陸するよ!」

葵の声で、天馬の意識は一気に現実に戻された。

小さい頃は沖繩にいたこともあって、天馬は飛行機には慣れっこだった。だが、今回は精神的な疲労も大きかったのだろう、いつの間にか深い眠りに落ちていた。

「もうここまできたんだ…」

天馬は新しい生活に期待を寄せる反面、大きな不安も抱いていた。天馬の脳裏に、日本で空港を発する前の円堂の言葉がよぎった。

「天馬。お前は今まで雷門のキャプテンとしてみんなを引っ張ってきた。グラウンドセレスタ・ギャラクシーでみんなと離れた時も、お前の心は雷門中にあった。せっかく雷門中のみんなとサッカーができるようになったのに、また離れるのは辛いことだろう」

「はい……とても楽しみなんですけど、正直、向こうでやっていけるか不安もあります。雷門中のサッカーが恋しいこともありますし」

「そうか。そうだな。だがな、天馬。遠い距離を隔てているからこそ深まる絆もある。そばにいなくなっただけで消える絆。それは本物の絆か？ お前が本物の絆をみんなと築けているなら、それはちょっとした間遠くにいっただけじゃ絶対になくったりしない。辛い時だからこそ、ポジティブに考えるんだ。これはみんなとの絆を試すチャンスなんだってな」

「みんなとの絆を試すチャンス……」

「ああ。仲間を信じる思いは、どんなに遠い距離を隔てても絶対に届く。サッカーを通して、お前らは固い絆で結ばれてる。それを、ズドドンと感じてこい」

「はいっ！」

「向こうでも、サッカー楽しんでこいよ!」

「はいっ! ありがとうございました!!」

「(円堂監督も言ってたんだ。辛い時だからこそポジティブに考える! センパイたちだって、きつとオレたちを信じてくれている。オレは雷門中に残ったセンパイたちを信じる。だから今は、思いっきりサッカー楽しむんだ!)」

天馬はひとり決意を新たに固めると、空港に続くゲートに向かった。

＊

天馬たちが降り立ったのは、ウィスルフレー国の北西の端にある空港・アダルベルト空港だった。近未来的なデザインが施された搭乗ゲートには、多くの乗客や見送りの人間で賑わっている。そこには日本人に限らず様々な国籍の人がおり、まさにサラダボウルのようなだった。

「確か、W E S C A がガイドさんを手配してくれているはずだけど…」

「ガ、ガイドさんを!」

「どれだけ制度いいんだって…」

葵のつぶやきに、天馬と信助が驚きの声を漏らした。

ふと横を見ると、剣城が何やら分厚い本を読んでいる。

「剣城、何見てるの？」

「ウィスルフレ国ガイドマップだ。ガイドさんがいるとはいえ、少しは見えていた方がいいだろう」

「剣城さっすが」

「オレにも見せてもらっていい？」

「ああ。ほら」

差し出されたガイドマップを見ると、ウィスルフレ国の全体図のページが開かれていた。

「どれどれ…」

天馬と信助は地図を読んだ。

ウィスルフレ国は太平洋の中心よりも少し北西のところに位置する島国だ。全体としては大きな4つの島が、Uの字を描くように並んでいる。4つの島は左から順にレッドランド、ブルーランド、イエローランド、ホワイトランドと呼ばれている。今天馬たちがいるアダルベルト空港はレッドランドの北端にあった。天馬た

ちはこれからガイドと落ち合い、フェリーに乗って、転校先の桜城中学校があるイエローランドに行く予定だった。

「えーっと、レッドランドは首都のウスルラがあるこの4つの島の中でも一番都会で、WESCAの研究は勉強方法一筋。ブルーランドは社会制度が充実していて、様々な視点からの教育を研究。イエローランドはスポーツが盛んだけど、人口が少し少なめ。で、ホワイトランドは…古き良き文化の恒久の保存を追求、か」

と、天馬がガイドマップを読んでいると、

「あれ、お前らもWESCAの命令か?」

聞き慣れた声がした。雷門中のみんなは振り返った。

そこには男がひとり立っていた。

紫色の髪をショートカットにし、長い前髪をかきあげながら、こちらに近づいてくる。

神童が驚いたような声を出した。

「南沢さん!?! どうしてここに!?!」

その男は、天馬たちがホーリーロードで戦った元雷門中サッカー部員の、南沢篤

志だった。

「俺はWESCAの命令さ。せつかく月山国光のみんなとうまくやっていけるかってとこだったんだがな」

彼はホーリーロードの最中に雷門中を抜け、月山国光中に転校していたのだ。

「南沢さんまでWESCAの命令なんて…結構広範囲の中学校に命令が渡ってるんですね」

「ああ。俺が聞いた話だと新雲学園にも命令が出たそうだ」

「新雲学園に!?!」

天馬が真っ先に反応した。新雲学園には天馬の親友のひとり、雨宮太陽が在学していた。彼も天馬がホーリーロードで戦った相手であり、時空最強イレブンとして、ともに人類の未来を守った仲間でもあった。

「ま、俺はあくまで聞いたただけだがな」

南沢が小さく肩をすくめる。

「で、南沢さんはどこの中学校なんですか?」

倉間が尋ねた。

「え? ああ…確か、桜城中学校ってとこだけど」

この言葉に、倉間の目が大きく光った。

「ええっ!? 南沢さんですか!?!」

「南沢さんも? ということは、お前ら…」

「俺たちも桜城中学校なんです!」

「本当か!?! じゃ、これから…」

「また、先輩後輩としてサッカーできますね!」

倉間が南沢に笑いかけた。普段は素直にならない倉間の笑顔に、天馬は少し驚いた。しかし、すぐに思い出した。

「(倉間センパイ…凄く南沢センパイに憧れてたもんな)」

倉間にとって、南沢とは目標だった。ホーリーロードで南沢が天馬たちの革命についていけずに雷門中サッカー部を退部した時、あまりの衝撃に、倉間が天馬につきかみかかりそうになったことがあった。また、一緒にサッカーができて、きっと倉間は喜んでいるに違いない。倉間の笑顔から、天馬はそう思った。

「世界教育特殊開発機構日本少年サッカー大使の皆様! お待たせいたしました!」

南沢との再会を喜んでいると、ガイドと思われる女性がやってきた。天馬たちと同じくらいの背丈で、とても若く、少女と言っているのだろうか、と天馬は思った。

「今回、皆様を桜城中学校まで案内します、さきなか咲坂ミズキです！よろしくお願いします！」

「「お願いします！」」

一同も挨拶を返す。

「30分ほど船に乗ることになりますが、お手洗いは大丈夫ですか？それでは、フェリー乗り場までご案内しますね！こちらです！」

観光会社のエンブレムが刺繍された黄色い旗を目印に、天馬たちはフェリー乗り場に向かった。

＊

「「いーーーーい!!」」

フェリーの甲板で快い潮風を全身に受けながら、天馬と信助が雄叫びを上げた。空は雲ひとつない青空で、海が遥か彼方で空とひとつつながっているのがはっ

きりと見える。こんな綺麗な水平線、秋ネエやサスケにも見せたかったな。天馬はそう思った。

「フェリー結構揺れてますけど、船酔いとか大丈夫ですか？」

咲坂が天馬たちに声をかけた。

「大丈夫ですよ！こんな綺麗な海と空見てたら、船酔いなんて吹っ飛びます！」

天馬が屈託のない笑顔で答えた。咲坂も穏やかな笑顔を見せた。

「羨ましいです。実は私、観光ガイドなのに船苦手で…」

「え、そうなんですか？」

「はい…実は乗る前に酔い止め飲みました。それも結構」

「咲坂さんこそ気をつけてくださいね」

「あはは、ありがとうございます」

面白い人だな、と天馬は思った。咲坂は天馬の知っている、ただ仕事を淡々とこなすガイドではなかった。観光の話でもない、なんでもない会話の端々に、咲坂の「観光ガイド」という仕事に対する思い入れの深さが感じられた。

「咲坂さんは、どうして観光ガイドになろうと思ったんですか？」

今度は、天馬が逆に質問してみた。すると、咲坂の目が大きく開いて、きらきら輝き始めた。

「母親が観光ガイドだったんです。家にいない日もあったんですけど、帰ってきた日はとても楽しそうな顔をしてたんです。よく、母は旅先での思い出話をしてくれました。それで、そんなに面白いならやってみないかって思って…ちょっとした体験のつもりでウィスルフレードの観光ガイドのアルバイトに応募したら、思ったよりうまくいって…今は勉強しながら、この仕事で一人暮らししてます」

「勉強しながらって…大変なんじゃないですか？」

「大変な時もあります。でも、義務教育なので学費はかからないし、生活費だけならなんとかできます」

「…義務教育…？」

「あ…」

そこで、咲坂は恥じらいの表情を見せた。

「えっ、義務教育ってどういうことですか」

咲坂はバツの悪そうな顔で答えた。

「あ、あの…実は…私、まだ中学3年生なんです」

「「えええ〜!?!?!」」

驚いた。どうりで成人しているように見えないわけだ。

「中学生がバイトできるんですか!?!」

「ええ。WESCAの作った法律で、ウィスルフレードでは中学校からアルバイトができるんです。義務教育の人は親の同意書がいるんですけど」

「観光ガイドがしたくて、ウィスルフレードにきて、一人暮らししているんですか?」

「はい。そのうち、もっと大きな会社に入ろうと思ってます」

咲坂は恥ずかしそうに、しかし、決然とした顔で言った。

天馬は感動した。自分とほとんど変わらない年齢の少女が、自分の好きなもので生活を立てているなんて。

「あつ、なんか島が見えてきたよ!」

信助が叫んだ。

「さっき通り過ぎたのが、ブルーランドです。それで、今日の前に見えているのが…皆さんの島、イエローランドですね」

「この島が…イエローランド…」

天馬は息を呑んだ。目の前に、自分の新しい世界が広がっている。オレはここで、新しい仲間とともに、新しい生活を始めるんだ。

「皆様、間も無く下船です！お忘れものにご注意くださいね！」

ガイドの制服の帽子を被り直し、再び黄色い旗を掲げた咲坂が、船室にいる者たちを呼びに行った。天馬と信助も、デッキに置いていた手荷物を取り、下船口へと向かった。船はもう、動きを止めていた。

2人は他のみんなと合流し、重々しく上がった船のゲートを、追いついてきた咲坂とともに降りた。

島に足を下ろしたとたん、咲坂が天馬に笑いかけた。

「ようこそ、イエローランドへ」

読んでくださった方ありがとうございました！！！！

第4話 これが桜城中学校だ!!

イエローランドに上陸した天馬たちは、咲坂に案内されながら、桜城中学校に向かった。イエローランドのアスファルトの道は綺麗に整備されていた。ところどころにテニスコートやバレーボールコート、体育館などが見られ、スポーツ好きにはこの上なく整えられた環境だった。天馬の住んでいた稲妻町のものにそっくりな河川敷もあり、子供たちが遊んでいるのが見られた。遠くに、「スポーツと教育の島イエローランド」と書かれた巨大な旗が見える。

「本当にいい環境だなあ。ここならサッカーの練習もはかどりそう!」

「気のせいかな、なんかグラウンドやコートが大きく見えるような…」

天馬が感激する中、信助は不思議そうに首を傾げた。

「多分、人が少ない分、大きく見えるんだと思いますよ」

信助の疑問に答えたのは、咲坂だった。

「そういえば、イエローランドは人口が少なめなんですよ」

「ええ。中学校に行ったらびっくりすると思います。人数が少ない割に学校がすご

く大きくて、教室や寮が空き空きなんですよね」

そう話しているうちに、バロック風の豪華な門が見えてきた。中学校の正門だろう。そばには教諭と思われる男性が立っていた。プレートに、いかめしい書体で、学校名が校章とともに刻印されている

AAAAAAウィスルフレー国立桜城中学校。

「ついに来た…ここが桜城中学校…」

天馬は生睡を飲んだ。ここが天馬の新しい学校。天馬たちは寮に泊まることになってから、新しい家でもあった。

咲坂は、男性に近づいて行った。

「犬飼先生、世界教育特殊開発機関日本少年サッカー大使の皆様をお連れしました」
咲坂が緊張気味の顔で言った。

「ありがとうございます、咲坂さん。ここから校長室までは私が引率します。列の最後尾からついてきてください」

男性教諭は優しく咲坂に笑いかけると、天馬たちに向き合った。

「はじめまして、世界教育特殊開発機関日本少年サッカー大使の皆さん。私は犬飼

良一と申します。皆さんの中で1年生の担当で、桜城中学校生徒指導部部長です。皆さん、新しい生活で不安があるでしょうが、すぐに桜城中学校での生活を楽しめるよう、全力でサポートします。よろしくお願いします」

犬飼はそう言うと、再びにっこりと微笑んだ。

天馬は犬飼の媚びのない笑顔に好感を抱いた。

「それでは、まず皆さんを校長室まで案内して、そこで学校の説明をします。手荷物はここに置いてください。説明の後、皆さんを寮まで案内します。寮まで行った後は自由行動にします」

＊

校長先生の説明を聞いた後、天馬は寮に向かった。生まれて初めての寮。天馬はワクワクした。

「松風くんの部屋は1302号室になりますね。3階の西端から二番目になります」

犬飼先生から鍵を受け取り、天馬は階段を上がった。

寮棟の構造は普通の学校と同じような感じだった。東西に延びた廊下の南側に、

教室の代わりにドアがいくつも並んでいる。違いは、北側に窓がなく、他の生徒と共同で使う風呂とトイレがあることだった。紺色の絨毯が敷かれた廊下を進んでいくと、指定された部屋にたどり着いた。天馬はドキドキしながら、金文字で「1302」と刻印された黒橡色のドアを開けた。

部屋は個室で、5畳半ほどの広さだった。勉強机とベッドの後は小さいクロウゼットしかない、とてもシンプルな部屋。洗練されたモノトーンカラーのデザインがなんともお洒落だ。天馬は一発でこの部屋を気に入った。クロウゼットを開けてみると、制服とサッカー部のユニフォームが入っていた。

宅急便で寮に届けられた着替えをクロウゼットに、さつき校長室で配られた教材を机にしまうと、天馬はユニフォームとサッカーボールをひつつかんで、寮を飛び出した。初日に、サッカー部の様子を見ておこうと思ったのだ。寮棟を出、グラウンドに入り、サッカー部を探した。

しかし、さつきクロウゼットに見つけたはずのユニフォームを着た者はいなかった。

「おかしいなあ…サッカー部がグラウンドにいないなんて…今日は練習ないのか

なあ？でも、他の部活は練習してるし…」

天馬は首を傾げ、グラウンドを走り周った。隅々まで探してみたが、サッカー部らしき生徒はいない。

「あの、サッカー部ってどこで練習してますか？」

天馬は水筒に水を汲んでいた、陸上部のマネージャーと思われる女子生徒に聞いてみた。

「ああ、サッカー部はいつもはグラウンドでやってたんですけど、ほとんど全員がWESCAの命令で転校しちゃって…今は確か2、3人しかいないそうですよ」

「えええゝ!？」

驚いた。サッカー部に2、3人しかいないなんて…WESCAはどれだけの生徒を転校させてしまったのだろうか。

「だから私、どこで練習してるのか知らなくて…」

「そうですか…」

仕方ない。諦めて他を探そうと思ったときだった。

「いや、東風谷^{こちや}くんなら裏庭で練習してるんじゃないかな。あの人、いつもあそこ

にいるから」

他の女子生徒が言った。

「裏庭……？」

「寮棟の裏側にありますよ」

「ありがとうございます！探してみます！」

天馬は急いで裏庭に向かった。

＊

裏庭はグラウンドに比べて暗く、人影も少なかった。

「誰もいなさそうだけど……」

あれ？あそこにいるのは誰だ？」

天馬は視界の端に一人の少年をとらえた。

少年は、木に長いゴム紐でくくりつけたサッカーボールを思いっきり蹴り飛ばした。ゴム紐が伸びきると、ボールが少年に向かって戻ってくる。少年は目を見開き、舞い戻ってきたボールを狙った。

「やあっ！」

少年は足元に戻ってきたスピードのあるボールを蹴り返そうとした、のだが、

「!? うわあっ!」

蹴るタイミングを計れずに、思いっきり空振りしてしまった。

「くっ!」

少年は悔しそうに歯ぎしりすると、ボールを元の位置に戻し、もう一度ボールを蹴りだした。

ボールが唸りを上げて飛んでいき、かなりのスピードをつけて戻ってくる。少年はもう一度ボールをよく狙い、

「てあっ!」

今度こそ当たった、と思ったが、

「あっ、蹴り損ねた…!」

ボールが明後日の方向に飛んでいってしまった。

ゴム紐につながれたボールが、その方向のまま、スピードを出した状態で戻ってくる。

「うわあ〜!」

変な方向から不意に飛んできたボールを見極めきれず、ボールは少年の頭に激突した。

「いっつう…!」

少年は痛そうに顔をしかめた。

天馬は思わず、少年に駆け寄っていた。

「大丈夫!? 結構思いっきり当たったよね!? 怪我してない!?」

「え? あ、ありがとう…えっと…き、キミは…?」

「オレは松風天馬。今日、転校してきたんだ。サッカー部に入ろうと思ってグラウンドを探したけど誰もいなかったから、場所を聞いてみたらキミが裏庭にいますって言われて…」

「転校…? あ…!」

怪訝そうだった少年の顔が、ぱあっと輝いた。

「今日、先生がWESCAの大使の人が来るって言ってたけど、キミのことだったんだね! 松風天馬くん! 噂は聞いてるよ!」

「えっ、キミ、オレたちのこと知ってるの？」

少年は首を激しく縦に振った。

「もちろん！だってキミたち雷門中は、ウィスルフレーでも超有名だもん！FF I V 2とかさ、俺、めっちゃ興奮しながら見てた！」

「あの試合、見てくれたの!？」

「うん！すっげえ感動した！夢みたいだよ！本物の松風天馬に会えるなんて！」

「ありがとう！キミの名前はなんていうの？」

「あっ、ごめん。興奮して自己紹介忘れてた…。」

俺の名前は東風谷徹。こちやおるこれからサッカー部としてよろしくね」

「よろしく！」

そういえば、今のサッカー部って2、3人しかいないって本当なの？」

天馬が尋ねると、東風谷は申し訳なさそうに顔をしかめた。

「うん…みんなWESSCAに引っこ抜かれちゃって、他の学校に行っちゃった。今残ってるのは俺と、1年生2人。でも、今日は2人とも部活休んで、俺1人で練習してたんだ」

「そうなんだ…」

天馬は残念そうな顔をした。

「ねえ天馬くん、早速で悪いんだけど、お願いを聞いてもらっていい？」

「どうしたの？」

「キミの必殺技が見てみたいんだ。俺、ディフェンダーなんだけど、まだ相手が必殺技でボールを持っていく感覚がわかってなくて…ちょっと、ドリブルの必殺技を見てみたいんだ。どんな風にボールが動くのか」

天馬の顔が輝いた。桜城中学校にきて初めてのサッカーだ。

「わかった！じゃ、ボールもらうね！」

「うん！」

東風谷はボールを天馬に渡すと、天馬と十分な間合いを取った。

天馬は新鮮な空気をいっぱいに吸い込んだ。

「よし、行くよ！」

「わかった！」

東風谷の言葉を合図に、天馬は東風谷に突っ込んで行った。

ここ数日なかった感覚が、脚に蘇る。

「…！は、速いっ!!」

東風谷が驚いたような声を上げた。

それを境に、天馬は一気にスピードを上げる。

東風谷との距離が、ものすごい速さで近くなる。

東風谷に後数メートルまで近づいたところで、天馬の周りに緑色の旋風が巻き起こった。

「《そよかぜステップ》!!!!」

東風谷の周りを美しい動きで旋回しながら、東風谷の体をかわす。

「うわあ！」

東風谷の感嘆の声が聞こえた。

そのままの勢いで、天馬は一気に裏庭を駆け抜けた。

東風谷は天馬に拍手を送った。

「すごいすごい！さすが雷門中!!」

「えへへ…オレも久しぶりにサッカーできて楽しかったよ」

二人はもっとサッカーしたかったが、運悪く今日の部活の終了時間がきてしまった。旅の疲れもあった天馬はここで練習を止め、二人は寮に戻ることにした。

読んでくださった皆様ありがとうございます!!!!!!

最後の方がthe☆雑でございます!

本当にごめんなさい!

次回もよろしく願います!!!!!!

第5話 集結!桜城イレブン!!

寮棟に戻った天馬と東風谷は、浴場でシャワーを浴びて普段着に着替えることにした。桜城中学校では寮棟の中にいるときに限り、普段着として私服の着用が認められていた。着替えながら、天馬は改めて東風谷の体を観察した。

東風谷の背は天馬と同じか少し低いぐらいだった。全体的にひよろひよろした体格で、筋力もあまりなさそうに見える。ディフェンダーとは言っていたが、積極的に相手に突っ込んでいくタイプではなさそうだ。今はシャワーで濡れているが、さっきまでは鮮やかな瓶覗色の長い髪をストレートに伸ばしていた。

シャワーと着替えを終えた天馬と東風谷は、一旦自室に戻ろうとした。驚いたことに、天馬の部屋の隣の1301号室は、東風谷の部屋だった。

「ここ、サッカー部密集地帯だね」

東風谷の言葉に、天馬はおもわず吹き出した。そういえば、反対側の隣の1303号室は信助の部屋で、その隣の1304号室は剣城の部屋だった。

天馬が部屋に入ろうと、黒橡色のドアに手をかけたとき、天馬はドアの下に黒い

大きな蜘蛛がついていることに気づいた。

「うわあ!!」

天馬はおもわず後ずさった。すぐに東風谷がやってきて、蜘蛛を調べながらつぶやいた。

「おかしいな…この寮棟に蜘蛛なんか出たことないのに…あれ? この蜘蛛、偽物だよ!」

「ええ!」

天馬はもう一度、蜘蛛をよく見た。本物そっくりだが、言われてみると不自然な感じがする。天馬は思い切って蜘蛛をつまんでみた。それはただのペーパークラフトだった。

「一体誰がこんなことを…」

天馬と東風谷が首を傾げていると、

「ドッキリ大成功!」

後ろから聞き覚えのある声がした。天馬と東風谷は振り返った。

四方に跳ねた見事なオレンジ色の髪。色白で整った顔には「してやったり」と言

わんばかりの、いたずらっ子のような笑顔が全開に広がっている。すぐに誰か分かって、天馬は顔中を綻ばせた。雨宮太陽だった。

「太陽！久しぶり！キミもここに転校させられたんだ！」

「久しぶり。WESCAの指示でね。驚かせちゃったらごめん。だけど、天馬たちもここに転校させられたって聞いたら、居ても立っても居られなかったんだ。先生から、ここがキミの部屋だって聞いてね」

「でも、なんでわざわざドッキリを仕掛けたの？」

「ああ、挨拶代わり」

太陽はけろっとした顔で答えた。

「天馬の知り合い？」

東風谷が訝しげな顔で聞いた。

「うん！オレの雷門中時代のサッカー仲間の、雨宮太陽。」

太陽、この子は東風谷徹。元からの桜城中学校のサッカー部員だよ」

「へえー、天馬のサッカー仲間かあ。よろしくね！」

「うん！こちらこそよろしく！」

太陽は右手の親指を立ててウインクをした。上機嫌なときの太陽の癖だ。

「南沢さんに、太陽かあ……いったいどんなチームになるんだろう?」

「え、南沢さんって、月山国光の?」

「うん。WESCAの命令でここに転校させられた。さっき空港で鉢合わせて、一緒にきた」

「なんだか、フォワード争いがすごいチームになりそうだね」

「あはは、確かに」

天馬はチームのフォワードのメンバーを思い浮かべた。剣城と影山、倉間と南沢、そして太陽。桜城中サッカー部の他のメンバーのポジションはまだ知らないが、攻めに関しては申し分ないチームになるだろう。

そのとき、東風谷の携帯電話のコールが鳴った。2人にことわってから東風谷はスマートフォンを取り出した。しばらくの間画面を見つめていたが、キーボードを使っていると思われるように指を滑らせた。

「うちのサッカー部の部長からの連絡なんだけど、練習は明日から始めてもらってほしいって」

「わかった」

天馬と太陽が同時に答えた。

「じゃあ、他の人たちにも伝えておくね」

天馬はそう言うのと、「雷門中サッカー部 転校組」と書かれたグループに、今のこととを伝えた。

「あ、徹、桜城中サッカー部のイナリンク、オレたちをグループのメンバーに入れてもらっていい?」

「僕もお願い」

「わかった!」

東風谷はすぐに、天馬と太陽を「桜城中学校サッカー部」のグループに加えた。天馬がすぐに他のメンバーをグループに招待した。自由行動でみんな暇なのだろうが、全員の登録が終わるまで10分もかからなかった。

全員が登録したあと、桜城中サッカー部の部長と思われるメンバーからメッセージが送られてきた。

因幡山^{いなばやま}転校生の皆さん、初めまして!桜城中学校サッカー部、因幡山^{いなばやま}嵐^{あらし}つす!

1年のディフェンダーで、名目上のキャプテンっす！よろしくお願いします！

天馬はすぐに返事を打った。

天馬：よろしくお願いします！

すると、すぐに返事が返ってきた。

因幡山：あ、タメ口でお願いっす！オレ敬語使われるのも使うのも苦手なんで！
天馬は安心した。どうやら、ここのサッカー部は人数の少なさの割に、結構オーブンな雰囲気のようなだ。

天馬が再び画面を見たとき、すでにメッセージが追加されていた。

信助：じゃ、お言葉に甘えて：明日の練習で、何か持ち物とかは？

因幡山：特にこれと言ったものはないっす！ユニフォームと水筒とタオルぐらいっす！

天馬：時間は？

因幡山：授業が終わるのが3時なんで、準備諸々の時間をとって、3時半から6時半までにしたいと思ってます！

「3時間か。寮の門限とかあるからなあ」

天馬が呟いた。ふと見ると、東風谷が猛然と携帯に向き合って、何かを書き込んでいた。

徹：みんな時間があるなら、今から自己紹介のミーティングしない？ 談話室が空いてるはずだよ！

太陽：いいねー！

剣城：賛成

神童：談話室ってどこだ？

徹：寮棟の一階の奥です！

葵：了解！

天馬たちはそこでイナリンクを閉じて携帯をしまった。

「徹、談話室まで案内してもらっていい？」

「もちろん！ついてきて！」

東風谷が階段に向かって歩き始めた。それに天馬と太陽が続いた。

「（どんな仲間たちがいるんだろう？ 楽しみだなあ！）」

天馬はワクワクしながら階段を降りた。

＊

桜城中学校の寮棟は、一階に談話室や食堂、自習室などの設備があり、二階以上が生徒の部屋になっている。男子寮と女子寮へはそれぞれ別の階段からいくことができるが、異性の寮に入ることは禁止されていた。

談話室には誰もいなかった。ふかふかした椅子がたくさん並べられており、空調も整っていた。隅に折りたたみ式の長机が積んである。東風谷はいくつか机を引っ張りだして口の字に並べた。天馬たちも手伝ったが、机は思ったより軽く、あっという間に並べ終わった。

「この談話室はいつでも使っていいの？」

太陽が尋ねた。

「うん。特に許可はいらないよ。机とかも自由に使ってオッケー。片付けはしなきゃいけないけどね」

東風谷がそう答えると、入り口が開いた。3人は振り返った。

少年が2人。天馬と太陽は知らない少年だった。

1人は背が高く、色白で、ねっとりした納戸色の髪を後ろでひとつのシニヨン

にまとめ、眼鏡をかけた真面目そうな少年。もう1人ははちきれそうに体格がよく、牡丹色のドレッドヘアをバンダナでまとめた少年だった。

「おう徹、もう来てたのか」

牡丹色の髪をした少年が言った。

「嵐！他には誰か来てた？」

「おう。なんか人がたくさん向かって来てた。ところで、君が松風天馬か？オレは因幡山嵐。よろしくな」

「うん、よろしく！」

天馬と因幡山は力強く握手した。その間に、雷門中サッカー部と南沢が談話室に入ってきた。

「これで全員揃ったな」

人数を確認すると、天馬たちは椅子に腰掛けた。

「改めて、初めまして！オレが因幡山嵐っす！よろしくお願いしまっす！」

次いで、因幡山の隣に座った納戸色の髪の少年が立ち上がった。

「神原空琉かんばらそらるです。1年で、ポジションはミッドフィルダーです。よろしくお願

します」

少年はボソボソと呟くように言うと、すぐに腰を下ろした。

天馬たちも自己紹介を終えると、ポジション決めの話に入った。

「このメンバーだと、ディフェンダー4人、ミッドフィールダー3人、フォワード3人にした方がいいんじゃないのか」

霧野が提案した。

「いや、フォワードを4人にした方がいいと思う。守りも重要だが、このメンバーは攻め主体の人が多いいから、攻めた方が点が取れると思うぞ」

倉間が反論した。

問答の結果、剣城と天馬の「攻め主体にした方がいい」という意見に全員が合意し、フォワードを4人にする方針になった。スタメンなどは今後の試合でおいおい決めていくという方向で落ち着いた。

「あと、何か話すことはないか？」

「あ、ひとついいですか」

因幡山が手を挙げた。

「オレ、桜城中のキャプテンとは言われてるんですけど、はっきり言って名目上だし、実力もそうそうあるわけじゃないんで…」

因幡山はそう言うのと、天馬をまっすぐに見つめた。全員の視線が天馬に集まる。「オレ、天馬に桜城のキャプテンをしてもらいたいっす」

「えええ!!」

天馬は困惑した。転校したばかりの自分がキャプテンをやってもいいのだろうか。

「大丈夫！オレよりも天馬にやってもらった方が、うちも絶対強くなるし！天馬、キャプテンやってくれないっすか？」

「い、いいのかなあ…」

「まあ、なるべく早めに決めてほしいっす！」

「うーん、わかった」

その他にも少し話し合いをしたあと、天馬たちは自室に引き上げた。時計を見ると、もうすぐ9時になろうとしていた。

「秋ネエとサスケ、今頃何してるのかなあ」

寝巻きに着替えながら、天馬はぼんやりと呟いた。明日からは学校が始まる。新しい生活が本格的にスタートするのだ。

天馬はベッドに入り、少し横になっていた。明日のことをいろいろ考えていたが、糊のきいたシャツが心地よく、いつの間にか眠りの国に足を踏み入れていた。

＊

「…以上をご報告申し上げます」

「うむ、ご苦労。下がれ」

「はっ」

男は部下を退散させると、カウチソファーにゆっくりと腰を下ろした。

「雷門中サッカー部が桜城中学校に無事転校完了、か」

男はパソコンを開くと、あるファイルを開いた。そこには、雷門中サッカー部と南沢と太陽AAAAAAAA新生桜城イレブンAAAAAAAAの個人のデータが書き込まれていた。

「雨宮太陽…南沢篤志…影山輝…狩屋マサキ…倉間典人…」

一人ひとりの名を、確認するようにじつくりと読み上げる。

「霧野蘭丸…西園信助…剣城京介…神童拓人…

そして…松風天馬」

男は全員を確認すると、にんまりと笑みを浮かべた。

「まずはお手並み拝見とどうか」

男はそう言うのと、メールのフォルダを開いた。

キーボードを指が走る音と、男のかすかな笑い声だけが、しばらくの間聞こえた。

読んでくださった方ありがとうございました!!!!!!

最後の方がごちゃごちゃで意味不明になってます…

あと、とところどころのシーンを飛ばしてます。ごめんなさい

次回もよろしく願います!!!!!!

第6話 桜城中学校、始動!!

AAAAAAAAAむかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。ある日のこと、おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

おばあさんが川でごしごしと洗濯物を洗っていると、

山の方から大きなサッカーボールが

どんぶらこ、どんぶらここと流れてきてAAAAAAAAA

「天馬!早く起きてよおー!」

耳元で、信助の何やら騒ぐ声が聞こえた。

「うーん…信助…うるさいよ…もう少し…寝させて…」

「天馬!今何時だと思ってるの!しっかりしてって!」

信助の隣には、東風谷もいるようだ。

「あと…10分だけだからあ…」

天馬はそう唸り、寝返りをうった。

「ああもうっ！早くしないと遅刻しちゃうよ!!」

信助の声が苛立ちを帯びてくる。

「うーん…何に…?」

その天馬の問いに、信助と東風谷が同時に答えた。

「授業……!」

「授業……?」

………

………!

あああああゝっ!……!……!

今日から学校なの、忘れてたあゝっ!……!……!」

天馬は飛び起きた。

＊

「はあ、はあ、はあ、はあ…ごめん！みんな!!」

大急ぎで着替えと朝食を済ませ、荷物を取ってきた天馬が、一階に駆け下りてきた。よほど急いだのだろう、息があがっている。

「もううっ!!何回起こしたと思ってるの!?全然起きなかったから焦ったよぉ!!」
信助が憤慨して言った。

「もし剣城くんが『念のため約束の時間の30分前には起こしに行け』って言うてくれなかったらと思うと、ヒヤヒヤするよ…」

東風谷が呆れたように言った。

「ええ、剣城、そんなこと言ってたの?」

天馬の抗議に、

「宇宙大会に行った時にそうした方がいいって嫌になるほど思い知らされたからな」
剣城が冷静な返答を返した。天馬はうなだれることしかできなかった。

「まあまあ、そのおかげで時間的にも充分間に合うようになったし、結果オーライよ!天馬も来たし、出発しよっ!」

葵が明るい笑顔で促した。一行は揃って校舎に続く道を歩き始めた。

「制服違うからかな、みんな、なんか雰囲気違うね」

寮を出て少し経った時、天馬が葵に話しかけた。

「そうだね。ブレザー着てる天馬って想像できなかったかも」

葵が笑いながら答えた。

桜城中学校の制服は、天馬にとって全く新鮮なデザインだった。黒を基調とした色のジャケットとズボン。白いカッターシャツの上には黒地に赤のチェックのネクタイがあり、エンブレムが縫い付けられている。葵は、同じ色のブレザーに、裾に白線が一本入ったスカートを穿いている。胸元に、男子のネクタイと同じ色の大きなリボンが付いていた。

「赤いシャツとマントじゃない剣城って、なんか変なの…」

信助のつぶやきに、

「ええ、剣城くんって、雷門にいた時制服着てなかったの!？」

東風谷が反応した。

「うん。剣城って、雷門中にきたばかりの時は、結構怖かったんだよね。なん

か不良みたいでさ、いつも赤いシャツにマントだったんだよ」

「…信助、今日の特訓覚悟しておけ」

剣城が低い声で脅すと、信助は口をつぐんだ。

そうこうしているうちに、一行は校舎の門の前にたどり着いた。初めてここに来た時に見た、バロック風の豪華な校門が開いていた。厳しい丸柱が、厳かに一行を見下ろしている。門をくぐり、白い石の道を少し進むと、門と同じくバロック風の装飾がされた建物が見えてきた。桜城中学校の校舎だ。

昨日校長先生に言われた通り、天馬たちはまず、職員室に移動した。

「転校生の松風です。担当の先生をお願いします」と天馬が言うと、教諭が2人出てきた。1人は、昨日校長室まで案内してくれた犬飼先生。もう1人は、天馬たちがまだ見たことのない、30代ぐらいの男性の教諭だった。一見整った顔だが、どこか無愛想で、目は気怠げそうだった。

「『おはようございます!』」

先生方に挨拶をする。

「おはようございます。早速ですが、2組の人は私に、3組の人はこちらの河田

先生について行ってください」

犬飼先生が、隣の男性教諭を手で示した。

「3組の担任の河田邦雪かわたくにゆきです。よろしくお願いします」

河田先生と呼ばれた教諭が、無愛想に挨拶をした。

「それでは、教室まで案内します。2組の人はこちらへ」

天馬は、影山と狩屋と太陽とは、そこで別れなくてはならなかった。天馬たちは3組、影山たちは2組だった。

「授業が終わってからグラウンドのバスケのゴール前に集合ね」

「また後でー!」

影山たちが出て行ったあと、天馬たちは河田先生に続いて、3組の教室に向かった。

「どうしよう、なんか緊張してきた…」

廊下を歩く間、信助が天馬に話しかけた。

「大丈夫! オレたちもいるし、きっとみんなも仲良くしてくれるよ! なんとかなるさ!」

天馬が信助を励ますように言った。

＊

WESCAの本部の学校ともなると、転校生などはそう珍しいものではないらしく、天馬たち4人が転入してきたと言っても、3組のみんなは特に驚いた様子は見せなかった。

「どこがいいかな…うーん…じゃあ、松風くんは東風谷くんの隣で、剣城くんが松風くんの隣。空野さんは荻元おぎもとさんの隣で、西園くんは…空野さんの隣で」

先生がそう言うと、指定された席に近い生徒たちが歓声を上げた。

天馬は隣の東風谷に話しかけた。

「改めて、クラスメートとしてよろしくね」

「もちろん！こちらこそよろしく！」

2人は拳を交わした。

葵が緊張した顔で椅子に座った。葵の隣の席の、山吹色の髪をショートカットにした少女が葵に話しかけた。

「空野葵さん、だよね？これからよろしくね」

「ありがとう！こちらこそよろしく。荻元さん、だっけ。下の名前はなんていうの？」

「れもん。荻元れもん」

「れもんちゃんっていうの!? かわいい！」

「ふふ、ありがとう。葵ちゃんもかわいいよ」

葵もクラスメートとうまく話せている。天馬はホッとした。

「せっかくだから、みんな自己紹介しようか。1時間目、学活だったし。荻元さん、学級委員長だよな？ あとはよろしく」

河田先生はそれだけ言うと、椅子に座り込んだ。荻元が前に出てきた途端に、クラスメートが静かになった。葵は驚いた。この娘、もしかして、このクラスの権力者みたいな人なのかな。そういえば、荻元は顔立ちも整っているし、堂々とした振る舞いをしている。荻元は手早く順番を決め、端の生徒から自己紹介をさせた。

自己紹介が終わると、河田先生が立ち上がった。

「特にやることないので、今から自習にします。静かにやること。それから、転校生が来て話したいのは分かるけど、次の授業に遅れないように。以上」

先生が好きになれなかった。

る人もいた。

「グランドセレスター・ギャラクシーってどんな感じだったの？」

「部活の時間に化身見に行っていない？」

「後でサッカー教えて！」

「うう…えーつと…」

天馬は困惑した。答えても答えても、また次の質問が出てくる。

しばらくそんな問答が続いていると、チャイムが鳴った。時間割を確認すると、次の授業は数学だった。天馬は休み時間の間だけ頑張ろう、と思っていた。そんな矢先、教室の入り口に犬飼先生がやってきた。

「今日の3組の数学ですが、牛岡先生うしおかが諸事情により遅刻したので、今日は自習にしようと思います」

[illegible]

＊

「天馬！どうしたんだ？遅刻するなんてお前らしくないじゃないか」

放課後、集合場所のバスケットのゴール前にきた天馬は、神童から声をかけられた。

「すみません神童センパイ：クラスメートの質問攻めに遭ってました：」

天馬は疲れ切った顔で答えた。後に続く信助と剣城も、疲労で顔を曇らせている。

「はは、まあ天馬たちはグラントセस्ता・ギャラクシーの優勝者だし、当然っちゃあ当然だな」

南沢が納得したように頷く。

「全く、質問なんてまともに受けるからだ：早くアップに移れ」

「ハイッ！」

「徹！もっとボールをよく見るんだ！」

「はいっ！」

「相手の体が動く方向を考えて！」

「わかった！」

「スライディングは躊躇わず思い切って行くんだ！」

「了解!」

天馬は東風谷のディフェンスの練習に付き合っていた。東風谷は飲み込みが早く、基礎はもうほとんどできるようになっていた。ただ、必殺技はまだ使えていなかった。中堅以上の学校に勝つのに、必殺技は不可欠だ。

「うん! 基本はいい感じ! 後は思い切って攻めれば、必殺技もできるようになると思うよ!」

「あり…がと…」

東風谷はもはや限界だった。今までこんなにハードな特訓はしたことがなかったのだ。

「あれ、あそこにいるのは神原かな?」

天馬はゴールの向こうで1人で壁にボールを蹴っている神原を見つけた。その背中はうつむき、暗い雰囲気が漂っている。

「神原! こっちに来て一緒に練習しよう!」

天馬は叫んだ。神原は何も答えなかった。

神原、何か悩んでるのかな。天馬は神原の元に走って行った。

「神原！1人でボール蹴ってても楽しくないでしょ？一緒に練習しよう！」
すると、神原は俯いていた顔を上げた。

「神原！コートまで一緒に行こう？」

「…天馬はいいよね」

「えっ？」

天馬は、神原がなんといったのか理解できなかった。

「…ううん、なんでもない。心配させてごめんね、天馬。行こうか」

「神原…？」

天馬は不思議そうに神原を見つめた。しかし、ガラス玉のような瞳からは、何もわからなかった。

天馬は少し動揺しながら、ゴールに向かって行った。

「…キミなんかにわかってたまるか」

神原はこっそりと、独りごちた。

＊

その夜、8時。倉間はベッドに寝そべり、携帯電話を睨んでいた。雷門中に残っ

た浜野と速水と、イナリンクで会話していたのだ。

浜野によると、雷門中の新キャプテンは錦龍馬になったそう。転校生は、白恋中の雪村豹牙や幻影学園の真帆路正などを含め、6人が入ってきたらしい。

倉間：雪村が入ってきたか。そっちもいいチームになりそうだな

浜野：そーそー！他の人も有名な人多くてさ、もうサイコーなんだって！

速水：みんな俺たちのサッカーを理解してくれて、楽しくサッカーできてますよ
浜野：ちゅーか、そっちのチームに南沢さんいるって、もはやずりーって！絶対強いだろ、お前の学校！

倉間：こっちはまだ未知数の人もいるがな

倉間は安堵した。転校した時は雷門中のサッカーが失われるのが怖かったが、どうやらそうでもなさそう。それに、純粹に嬉しかった。多くの人が、雷門中のサッカーがなくならないように戦ってくれている気がした。

そう考えていると、浜野からメッセージが来た。

浜野：ちゅーか、そっちのチーム、大半は雷門中なんでしょ？お前ら、転校した意味なくね？

速水：確かに。南沢さんと雨宮くんもいるんでしょう？知ってる人たちばかりじゃないですか

倉間：はっとした。言われてみればその通りだ。

倉間：先生は研究のためとは言っていたが

浜野：でもさ、研究のためだからって、なんでみんながみんなを桜城にいかせんの？それこそ、研究のためなら別々にした方がいいじゃん

速水：ですよね…そうじゃないと、転校した雷門中全員が桜城のやり方に染まってしまうですよ

倉間：だよな…俺にはよくわからん

倉間：は考え込んだ。確かに、浜野がいうように、本当に自分たちを教育の研究の対象とするなら、全員を1つの学校に転校させるなんてことはしないだろう。

それに、倉間にはもう1つ気になることがあった。なぜ、南沢と太陽も桜城に転校させたのだろう。元雷門中の南沢はともかく、太陽がなぜ？

まさか…自分たちが知らされたのとは違う、なにか別の目的があるのだろうか？
AAA悩んだところで仕方がない。今俺にできるのは、サッカーの練習をすること

だけだ。今はそれに集中しよう。

頭に引っかけることを感じながら、倉間は再び画面に向き合った。

読んでくださった方ありがとうございました!!!!!!

次回もよろしく願います!!!!!!!!!!!!!!

第7話 不良少年と聖セバスティアヌス祭！

「はっ、はっ、はっ…」

ある日曜日の夕方、暗くなり始めた頃。天馬は自主練として、東風谷と信助と剣城と一緒に、桜城中学校の外周をランニングしていた。あたりは静かで、心地よく涼しい空気が辺りを満たしていた。

天馬たちが桜城中学校に転校してから、1週間が経った。天馬たちはだいぶ新しい生活に慣れてきたところだった。寮の設備は一通り使ったし、広い学校の中で迷うこともなくなった。信助のように、食事の後に眠くなってうっかり女子の寮に入ってしまうこともなくなっていた。

「よし、今日はこの辺で」

天馬はそう言うと、正門の前で止まった。

「お疲れ様」

「ああ、お疲れ」

信助と剣城はまだまだ余裕がありそうな顔をしていた。しかし、

「ぜはあ…ぜはあ…ふう…ふう…」

東風谷は苦しそうな息を漏らしていた。とつくに体力の限界を迎えていた。

「徹、大丈夫？」

天馬が心配そうな顔で、東風谷に手を貸す。

「大丈夫…ごめんね…俺だけこんなにトロくて…みんなの脚引っ張っちゃって…」
徹は申し訳なさそうに言った。

「そんなことない。徹は1人でもすぐ練習頑張ってたじゃないか。今朝だって、俺たちと一緒に自主練させてくれて言ってきたし。そんなに努力してる人が、チームの脚を引っ張るなんてことないよ」

天馬が徹を励ました。

「そうそう！それに、ちゃんとしてくれてたじゃん！」
信助が続けた。

「ありがとう…」

東風谷はまだ息切れしていたが、嬉しそうな顔で答えた。

「ほら、これで汗を拭け。早く寮に帰るぞ」

剣城がハンドタオルを差し出しながら言った。

「うん…ありがと…」

徹がそう言って、ハンドタオルを受け取ろうとした時だった。

「オイおめえら！俺たちの縄張りで何してるんδει!!」

突然、ドスの効いた声が聞こえた。

「誰だ!？」

天馬たちが声のした方を見ると、そこには学ランを着崩した男が4人立っていた。見るからに不良だった。

「うわ…第二中の奴らだ…」

東風谷が嫌なものを見るような目で言った。

「第二中？」

信助が東風谷に耳打ちで聞いた。

「うん。この辺にある、もう1つの中学校。ここら辺を根城にしてるこいつらみたいなボンクラがうようよしてるんだ」

「そのロン毛！今おめえなんつた！」

東風谷がバツの悪そうな顔で答えると、4人のうちで肥満体質の男が、東風谷を睨みつけた。

「…」

東風谷は固まった。4人の男が天馬たちに近づいてきた。

「あ?今おめえなんつったって聞いてんだよ。あ?なんつったんだよ!」

「や、やめろよ!」

天馬が仲裁に入ろうとした。

「何だ天パー。俺たちとやる気か?」

「別にやる気なんて…」

「さっさと答えろや!」

「うっ…」

面倒なことになったな。天馬は突破口がないかと考えた。無駄な争いはしたくない。

「やる気がないならこれをおめえらの学校に捨てとけよ。そしたらそのロン毛が言ったことも見逃してやらあ」

そう言うのと、肥満体質の男はポテトチップスの空袋を天馬たちに投げつけた。

「ええー、そんなの自分でやりなよ！」

途端に信助が抗議の声を上げた。思わぬ信助の反撃に、天馬は焦った。

「ちよっ、信助！下手に挑発したら……！」

「なんだそこのチビ！俺たちなめんなよ！俺たちあ第二中のサッカー部トップクラスだぞ!? おめえらみてえなヤワなんざ瞬殺だかな!!」

長身の男が啖呵を切った。

「えっ、サッカー部!？」

天馬は驚いた。この人たち、サッカー部なんだ。どう見ても何かの部活に入っているように見えないけど。

「まあタカ、そう焦んなや」

「番長！」

タカと呼ばれた長身の男は、慌てて脇に退いた。そこには、金髪の、天馬より少し背の高い番長格の男が立っていた。

「そや、この際やからサッカーで決めようや。わいらとサッカーバトルせい。おめ

えらが勝てばわいらは帰ったる」

天馬は少し安堵した。サッカーに勝てば帰ってくれるんだ。しかし、今度はタカが口を開いた。

「ただし俺らが勝てば、ロン毛とチビは俺たちがしばらく。ついでに天パーとその幽霊みたいな白ノッポも」

「ええゝ!?」

天馬は思わず声を上げた。なんでオレが巻き込まれなきゃならないんだ。剣城なんて何もしてないじゃないか。すると、

「余計なこと言うな! わいはこいつらとサッカーがしたいだけや! ! !」

番長格の男が、タカを怒鳴りつけた。男の目は、熱意に燃えていた。この男のサッカーへの思いは、嘘ではないように見えた。天馬のこの男への嫌悪感は、すぐに消えて無くなった。

「: わかった。サッカーバトルだ!」

天馬が4人の不良を見据えて言った。

「上等だ! ボクたちと勝負だ!!」

「俺たちの力を思い知らせてやる！」

信助と東風谷もやる気だ。

「……とりあえずはグラウンドに入るぞ。こんなところでお前らと一緒にいたら補導されるかもしれないからな」

剣城は相変わらず冷静に、客人を校門の中に入れた。

＊

サッカーバトルは4人対4人で、先に一点を決めた方が勝ちというルールで行うことになった。天馬たちはちょうど、フォワード、ミッドフィルダー、ディフェンダー、ゴールキーパーが1人ずつのパーティだった。どうやら向こうもそうらしく、ポジションの人数的にはイーブンだった。

向こうのチームからキックオフだった。

肥満体質の男が、タカにパスを送った瞬間、天馬はタカに突っ込んで行った。

「(まずは様子見しよう)」

はあああああーっ!!」

天馬はタカの足元に狙いを定め、一気に滑り込んだ。

ザンツ!!

「があっ!」

タカが派手な音を立てて転ぶ。天馬が見事なスライディングを決めた。

「天馬!」

剣城が合図を送る。間髪を入れず天馬は剣城にパスを送った。刹那、

「ハンツ」

番長格の男がすぐさまパスのコースを遮り、ボールを奪った。

「!?」

剣城は驚いたように目を見開いた。どうやら地元の中学生であることに油断していたようだ。

番長格の男はそのままゴールに向かっていく。天馬と剣城は急いでゴールに下がろうとするが、男は思いの外足が速かった。

「…!させるか!」

猛スピードで突っ込んでくる男に、徹が立ちはだかった。しかし、男がその巨体からは想像もできない身軽さで、宙返りを決めた。瞬間、ボールが分裂する。

「《イリュージュンボール》!!」

「!? うわあっ!!」

無数に目の前を飛び交うボールに徹が戸惑ったすきに、男は徹の脇をすり抜けて、あつという間に徹を抜いてしまった。ゴールに一直線に突っ込んでいく。

「信助!!」

天馬は信助に警戒するように彼の名を呼んだ。信助の顔がさらに陰しくなり、完全にゴールキーパーの体勢に身構える。

男はそのままの勢いでボールを真上に蹴り上げると、自身も高く跳躍し、横方向に回転を始めた。男の周りに炎の渦が舞い上がる。

見たことのある、光景AAA

「《ファイアトルネード》!!!!!!」

男はボールに向かって思いつき足を振り下ろした。ボールが炎の弾丸と化し、唸りを上げてゴールに突き刺さる。

「ファイアトルネードだど!?」

剣城が驚いたような声を上げた。無理もない。1人の不良に見える少年が、あ

の豪炎寺修也の必殺技、ファイアトルネードを完璧な動作で放ったのだから。

しかし、百戦錬磨の信助はこのくらいでは動じなかった。信助はボールの動きをよく見極めると、落ち着いた動きで飛んできたボールをそのまま受け止めた。炎を帯びたボールの勢いが急速にしばむ。

「剣城！ いっくよ！」

信助はかなりゴールに近づいていた剣城にボールを投げつけた。剣城が受け取り、ゴールに向かって電光石火の如くコートを駆け抜ける。

しかし、いつの間に体勢を立て直し、剣城に追いついた番長格の男が剣城の行く手を阻んだ。

剣城は難なくかわしたが、男はしつこく剣城にくっついてくる。剣城は天馬にパスを回した。しかし、天馬がパスを受け取ろうとした瞬間。

「であっ！！！」

男が、ほんの一瞬の隙を巧みに狙い、天馬にタックルを食らわせた。

「うわあっ！」

不意を突かれた天馬が一瞬よろめいた隙を狙い、ボールは再び男に渡った。

「さすが松風天馬。だが、わいもそろそろ本気でいくで！」

そう男が叫んだ刹那、男から紫色のオーラが舞い上がった。それはすぐに、1つの形に変わる。

「化身!？」

天馬は思わず叫んだ。まさかこの男が化身を出せるとは思っていなかった。

「てあああああつ!!」〔鉄騎兵ナイト〕!!!!!!」

男の頭上に、黒い馬のような形をした化身が現れた。

「はあっ!!」《ギャロップバスター》!!!!!!」

なんと男は、その位置からロングシュートを放ってきた。黒馬の嘶きが戦場に轟く。

だが、今回は距離があるため、信助も応じるための余裕が十分にあった。すぐに、信助の頭上に、青と黄色のオーラを纏った神のような化身が現れた。

「〔護星神タイタニアス〕!!!!!!」

信助は今回もしっかりとボールを見極め、守護神の手でしっかりとボールを抱えた。

ボールは天馬に渡った。

「もしかしたら、こいつら全員化身使いかもしれない……！オレも油断しちゃダメだ!!」

そう思った刹那、天馬の背に紫色のオーラが舞い上がる。それは赤と青の翼を持った魔神の姿に変わった。

「魔神pegasusアーク」！！！！！！

天馬は化身・ペガサスアークと共に、フィールドを駆け抜けた。

「行かせるか!!」

さっきの男がナイトを纏って、天馬に近づいてくる。しかし、

「やあっ!!!」

「がっ！！！！」

今回は天馬が男を弾き飛ばした。すぐさまゴールに向かい、神速の一撃AAAAA

「《ジャスティスウイング》!!!!!!」

青い光を纏ったボールが、疾風の如くゴールに飛び込んでいった。

「あああああーっ！！！！！」

ゴールキーパーの男は天馬の化身技に臆したのか、自らゴールから退いてしまった。天馬のジャスティスウイングが、あっけなくゴールに突き刺さった。

「よしっ！オレたちの勝ちだっ!!」

＊

「…あっはっはっはっはっ!!」

突然、番長格の男が笑い出した。

「えっ、どうしたの？」

天馬は驚いたように尋ねた。男はまだ笑いを堪えられないように言った。

「あっはっはっ…いやー、おもしろかった！こんなに楽しいサッカーしたんは久しぶりや!! やっぱ本物のサッカーは格が違うわい！おめえらとサッカーバトルして正解やったわ!!」

男は天馬に握手を求めた。

「驚かしてすまんかったな。桜城中に松風天馬が転校してきた聞いて、居ても立っても居られなくてな。わいは第二中のキャプテンの菊池則夫きくちのりお。これからよろしく

な」

「そうだったんだ!こっちこそよろしく!」

天馬は菊池と力づくよく握手した。

「ほんまにおめえらはええチームやな。おめえら、聖セバスティアヌス祭は出るんか?」

「え:聖セバスティアヌス祭?」

天馬は何のことかわからなかった。

「なんや、聖セバスティアヌス祭知らんか?」

「知らない」

天馬たちは首を振った。

「聖セバスティアヌス祭っちゅうんは、WESCAが主催する、ここら辺のサッカーのフェスティバルや。ウィスルフレー中の中学校が集まる、サッカーの大会。オープン参加で、当日参加もバッチリオーケーの大会やねん」

「へえ」

「どれぐらいのレベルの人が出るの?」

信助が尋ねた。

「まあ、WESCAが世界中から中学生たちをウィスルフレーの学校に引き入れてるさかい、もちろんサッカーの実力の強い人もぎょーさん来る。最初は弱いところばっかと当たるかもわからんが、勝ち進めば世界大会レベルになると言ってるえんちゃうか」

「世界大会レベル!？」

天馬と信助が驚いた。まさかFFI V2レベルの試合が、ウィスルフレーでもできるなんて！

「わいらも参加するさかい、どこまでわいらが行けるか知らんが、もし当たった時は覚悟しとき。今日のリベンジしてやるさかい」

「うん！オレたちも負けないよ！」

菊池は、天馬と力強く拳を交わした後、取り巻きと共に帰って行った。

「聖セバスティアヌス祭か…」

「天馬！もちろん参加するよね！」

「うん！世界レベルの人と戦えるんだ！オレたちも黙ってちゃいられない!!」

「すぐに熱くなるところは全然変わってねえな」

剣城が呆れたように言った。

「だって…オレたちの新しいサッカーがそこには待ってるんだ! だったらオレは…誰よりも早くオレたちの新しいサッカーに会いに行くんだ!…!」

天馬はそういうと、星が見え始めた空を仰いだ。

「待ってろよ! 聖セバスティアヌス祭!…!」

これ以上は出せない声で叫んだ。

読んでくださった方ありがとうございました!!!!!!
関西弁でおいしいところがあったら教えてください。
次回もよろしくお願いします!!!!!!

第8話 目指せ! 聖セバスティアヌス祭!

短いです

次の日の練習が終わった後、天馬はメンバー全員に部室に集まってもらうことにした。部室はグラウンドの隅にあった。

「オレ、みんなで聖セバスティアヌス祭に参加したいと思ってるんです」

天馬は全員が集まるなり、そう言った。

「聖セバスティアヌス祭って:ウィスルフレーでも最大のサッカーの祭典にか!?!」
因幡山が驚いたように言った。

「うん! オレさ、ウィスルフレーのサッカーってどんなものなのか見てみたいんだ」

天馬は意気揚々と言った。

「聖セバスティアヌスは凄いよ!世界中から有名な中学サッカー選手たちが続々と集まってくるんだから!」

東風谷が興奮気味に言った。

「え、見たことあるの!？」

信助が東風谷の言葉に反応した。

「どんな感じだった？」

天馬が信助に続いた。

「あれは本当に凄い!何万人の観客の前で、有名な中学サッカー選手たちがスーパープレイのオンパレード!最近是天馬たちの活躍でサッカーが爆発的なブームになってるからね。去年の大会なんて、俺感動したよ。天馬たちにも見てもらいたかったなあ!」

東風谷が目を輝かせた。

「そんなに凄いサッカーの祭典なんて…行くっきゃないや!」

天馬が続けた。

「世界中のサッカー選手が集まるって…それはF F I V 2とは違った世界選手権と

「うわけか?」

霧野が尋ねた。

「はい。聖セバスティアヌスはウィスルフレの学校に限らず、WESSCAが認定した世界中の学校が自由に参加できる大会なんです。毎年、何千という学校が世界から集まるんですよ」

東風谷が答えた。

「新しいチームで、もう一度世界大会…か。悪くない話だな」

神童がうなづいた。

「行きましようよ! 絶対面白いですよ!!」

天馬が興奮気味にまくし立てた。

「あ、さっき練習の時に調べたんですけど、聖セバスティアヌス祭には特別ルールがあるみたいですよ」

天馬たちの会話に、葵が口を挟んだ。

「特別ルール?」

「ええ。たしか…」そう言うと、葵は胸ポケットからピンクのメモ帳を取り出し、

ページをめくった。

「あった…公式のホームページによると、『必殺技と化身は使用可能、ただし、化身アームド、ミキシトランス、ソウルの使用は禁止』だそうです」

「ソウル禁止…」

天馬がつぶやいた。

ソウル。それは化身とはまた違った、人間の持つ「ケモノの力」のことだ。天馬たちはこのソウルを使い、グランドセレスタ・ギャラクシーで、宇宙の相手に立ち向かったのだ。

「ソウル禁止か…てことは、必殺技と化身だけで勝負しなきゃいけないってわけか」
「え…このメンバーで？」

神原がつぶやいた。

「桜城のメンバーは、誰も化身どころか、必殺技も使えないよ。それなのに、このメンバーで行くの？」

天馬は力強く首を縦に振った。

「もちろん！」

「ええ…? いままで大会どころか練習試合もまともに勝てなかった俺たちだよ…?
松風君、本当に勝てると思ってるの…?」

神原が弱々しく天馬に尋ねる。それを聞き、天馬は神原に正面から向き合った。
「大丈夫! 自分を信じて一生懸命努力すれば、ゼツタイ強くなれる! オレたちも、
神原たちが納得するまでとことん練習につきあう! 今は勝てなくても、サッカー
が好きなら、サッカーはその気持ちに必ず答えてくれる!」

天馬はにっこりと笑った。

「なにかなるさ!!」

それを聞くと、神原は納得したのか、

「…そうだね」とつぶやいた。

「天馬! その通りだよ!」

信助が同調した。

「全く…天馬、お前は何かあっても変わらないんだな」

神童が呆れ半分、感心半分で言った。

「えへへ。雷門中で円堂監督から教わったサッカーです。そう簡単に忘れませんよ」

天馬の答えに、神童も納得したようにうなづく。彼もまた、あらゆる場面で雷門中のサッカーの力を実感してきた者の1人だった。

「それじゃ、天馬：オレたちが聖セバスティアヌスで勝てるように、指南を頼んでいいですか？」

因幡山が尋ねた。

「もちろん！とことんまでつきあうよ！」

天馬は自信有り気に答えた。

「じゃ、天馬。キャプテンになるか、もう決めたんすね？」

「あつ」

そういえば、天馬は因幡山から桜城のキャプテンを務めるか決めるように頼まれていたことを、天馬はすっかり忘れていた。

しかし、答えはすぐに決まった。

「：よし、オレ、キャプテンやるよ！」

天馬は堂々と宣言した。

「おおおー！ありがとうつす！じゃあ、これからは天馬にキャプテンをバトンタッ

チするっす！」

因幡山は嬉しそうに言う、腕につけていた、白と黒のバンドAAAAAキャプテンの印AAAAAを外し、天馬に渡した。天馬はそれを大切に受け取った。

「よし！明日から早速、聖セバスティアヌス祭に向けて練習するぞ！！」

「『おう!!!』」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

今日の記録

3年生の男子。過去に事故によって顔に重度な火傷を負い、それが原因で親に捨てられた。過呼吸、人間不信、軽度の精神錯乱の傾向が見受けられた。まだ意識の混濁が見られたが、短時間のうちに回復する見込み。

ところで、私は一体全体どうやってこの技術を開発するに至ったのだろうか。私

は何年か前、いきなり寝食を忘れて研究に没頭するようになり、この技術を開発した。飽き性の私はこれほどまでに何かに執着することなどなかったはずだが。何か、特別な力が私を突き動かしているかのようだ。しかし、それは一体なんなのだろうか。その特別な力とは?それに、私はなぜか、その答えを知っている気がする。私はすでに答えを知っていて、私はそれを忘れていただけではないのか?いや、そんなことはどうでもいい。とにかく、私は知りたい。一体何がこんなに私の開発欲を刺激するのか。

とりあえず、今日は今までと何も変化はなかった。それだけでは物足りない気がするが、それだけしかないのだから仕方ない。

今日で251人目だ。後何人残っているだろうか。

読んでくださった方ありがとうございます!!!!!!

更新が大変遅れて申し訳ありません…見事にストーリーに詰み、必死で考えていました。

次回から第2章に入っていきたいと思います! 展開が早いとは思いますが…

第2章は天馬くんとオリキャラ、東風谷と神原中心になるかと思っています。苦手な方はご注意ください。

次回もよろしく願います!!!!!!

イナズマイレブン GO スカイハイ

著者 吟遊詩人ルナ

発行日 2021 年 7 月 23 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/93209/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
